

# 近代美保関の町家建築について

**はじめに** 奈文研は令和4・5年度（2022・2023）の2カ年にわたり、島根県松江市美保関町美保関地区において伝統的建造物群保存対策調査を実施した。この調査は文化庁および島根県の補助を受けて、松江市が奈文研に委託し実施したもので、美保関地区の歴史的価値をあきらかにすること、さらに伝統的建造物を活かした今後のまちづくりに寄与するための基礎資料とすることを目的とした。この調査成果報告書は2024年3月に刊行された<sup>1)</sup>。本報告は美保関地区に現存する町家建築のうち、特に近代における町家建築の特質について報告するものである。

調査対象の美保関地区は、島根半島の東端に位置する門前町・港町である（図20）。半円弧状の湾である美保関漁港に面して集落が展開する。集落を貫通する主要街路の「本通り」とそれに直交する谷筋の街路に町場が形成され、集落の東から美保小路、月名小路、中浦小路、泊小路、西小路の5つの小路に自治区が分かれている。受託調査ではこれら5つの自治区を調査範囲とした。調査範囲内において、伝統的建造物と判断される建物のうち、詳細調査を実施した住宅建築の主屋および旅館建築の主要なものを表1・図20に掲げる。

**近代美保関の略歴** 美保関地区は先史時代の遺跡が存在し、『古事記』などの文献にも地名が記載され、古代以前から歴史が確認できる。中世以降、海上交通の拠点として山陰海域の中心的な港となり、美保神社を中心とした集落が形成されたと考えられる。近世においては、北前船の風待ちの寄港地として栄えた。

明治初頭の美保関地区は戸数370戸、人口1,613人であった。近代の繁栄のひとつに商船の寄港があげられ、明治9年（1876）に三菱商船、明治17年（1884）には大阪商船が山陰航路を相次いで開設した。明治28年（1895）設立の隠岐汽船株式会社による境－西郷航路では美保関港が寄港地となり、明治40年（1907）には合同汽船株式会社が設立され、松江－美保関航路が開通し、汽船交通の全盛期を迎えた。明治以降、港湾機能は徐々に境港へ移っていくが、美保関地区は美保神社の門前町として観光業が中心となっていました。

**敷地形状と間口** 美保関地区の敷地は街路に面して細

長い短冊形を呈する。敷地内に建つ主屋は、街路に面して敷地間口いっぱいに建てられた、切妻造、平入、2階建の町家建築を基本とする。伝統的な町家建築の間口は2間半から3間のものが約6割を占める。

**伝統的な町家建築の分類** 美保関地区に現存する伝統的な町家建築は、その平面形式によって大きく3つの建築類型（住宅型、船宿型、旅館建築と仮称）に分類される。住宅型は住宅としてのみに使用された建物である。船宿型はかつての船宿に由来する建築で、接客のための平面構成や廻船問屋を営んでいた船宿特有の建築形式をもつ。旅館建築は昭和初期頃の観光客の増加にともない建設された宿泊施設である。

**各階の平面構成** 一部の旅館建築を除いて、1階の平面は片側に通り土間を配し、これに沿って居室部として2～4室を並べる間取りで、正面に奥行半間の縁を設ける形式を基本とする（図21）。またこの居室部は1列だけの形式が大半である。便所や風呂などの水まわりは通り土間の背面延長上に設ける。

2階の平面は住宅型と船宿型で異なる（図22）。住宅型の町家では、近世末期から明治初期にかけては物置として利用し、天井を設けない。明治後期頃から徐々に居室化が進み、天井高も高くなる。船宿型の町家では3室構成を基本とし、中央に中廊下あるいはナカノマを設け、正面および背面側は客室として利用した。これら客室には1階下屋の上に設けた縁を備える。2階は接客の場として整えられ、ナカノマは配膳や芸者が芸を披露する場所として機能し、この船宿における2階座敷と縁の成立は、明治後期以降の住宅型の町家にも伝播した。このような2階座敷・縁の発達は美保関地区の近代における町家建築の大きな特徴のひとつである。

**架構** 近世末期頃の住宅型では1階正面に半間の下屋を設け、背面側の1室も下屋とし、2階は正面側の2室分に設ける。船宿型では上屋部分を縦二階とする。2階縁が設けられたのは明治中期頃は、1階正面下屋の直上に2階縁をのせる構造であったが、明治後期頃になると、1階下屋の繋ぎ材の上に桁行方向に土居桁を架け、その上に2階縁を造る構造へと発展した（図23・24）。この構造は船宿型だけでなく、住宅型でも採用され、近代における当地区の町家の変遷過程を示す。

**表構** 主屋表構の形式は前述のように建立時期に

表1 調査物件(民家・旅館)一覧

番号	小路名	物件名称	建物種類	類型
01	美保小路	濱延舎(旧濱中屋)	主屋	船宿
02	美保小路	木村家住宅	主屋	住宅
03	美保小路	福間館離れ(旧大下舎)	東棟 西棟	船宿
04	月名小路	月那離宮	主屋	旅館
05	月名小路	美保館別館柘榴	主屋	船宿
06	月名小路	定秀家住宅	主屋	住宅
07	中浦小路	丸谷家住宅	主屋	船宿
08	中浦小路	旧田中家住宅	主屋	住宅
09	中浦小路	山本家住宅(山元)	主屋	住宅
10	中浦小路	木挽家住宅	主屋	住宅
11	泊小路	旅館美保館旧本館	主屋	旅館
12	泊小路	三代家住宅	主屋	住宅

番号	小路名	物件名称	建物種類	類型
13	泊小路	入江坂本屋	主屋	船宿
14	泊小路	旅館美保館本館	北棟 南棟	旅館
15	泊小路	小泉屋	主屋	船宿
16	泊小路	旧池田屋	主屋 座敷棟	住宅
17	泊小路	旧宍道屋住宅八十八	主屋	住宅
18	泊小路	横山家住宅	主屋	住宅
19	泊小路	旧野村家住宅	主屋	住宅
20	泊小路	美保神社倉庫	主屋	住宅
21	泊小路	旧綱谷家住宅	主屋	住宅
22	泊小路	藍田家(旧森山家)住宅	主屋	住宅
23	西小路	旧奥村家住宅	主屋	住宅

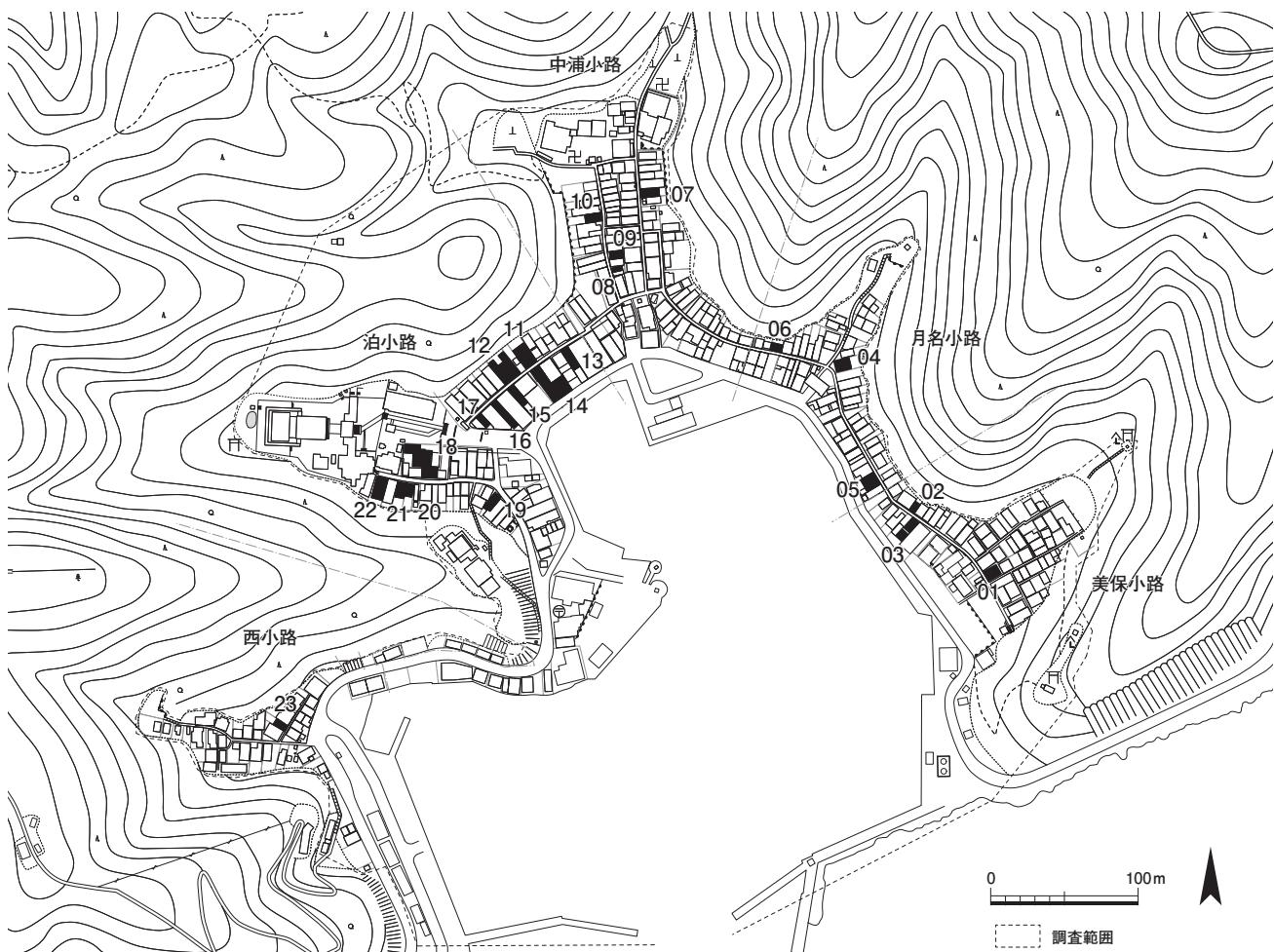


図20 調査物件(民家・旅館)の位置図 1:5000

よって異なり、1階に下屋を設ける近世末期頃の形式から、1階下屋上に土居桁を架けて2階縁を設ける明治後期頃の形式に変化した。昭和に入ると、2階正面の壁面を1階とそろえる形式へとさらに変化し、1階と2階の境には小庇が取り付けられる構えとなった。時代が下るにつれて、2階壁面が正面に移動していくことも特徴のひとつである(図23)。表構の時代的変遷はあるものの、1階下屋もしくは小庇の軒高はほぼ統一されており、町並み全体においては独特の統一感がみられる。

さらに、町家の外観上の特徴として、軒下の出桁を支

える腕木がある(図25)。腕木は江戸末期から昭和前期まで、各年代を通じて設けられており、特に雲形の縁形をもつ独特な形状の腕木を使用する町家が多くみられ、美保関地区の町並みを特徴づけている。

1階および2階正面の建具は、1階は掃き出し窓、2階は腰高窓とし、特に1階は後述の信仰との関連が強く影響していると考えられる。

**祭礼と建物との関係** 美保関地区の核となる美保神社には、青柴垣神事や諸手船神事など、全国的に有名な祭礼が多い。これらの祭礼には美保神社の神職だけでな

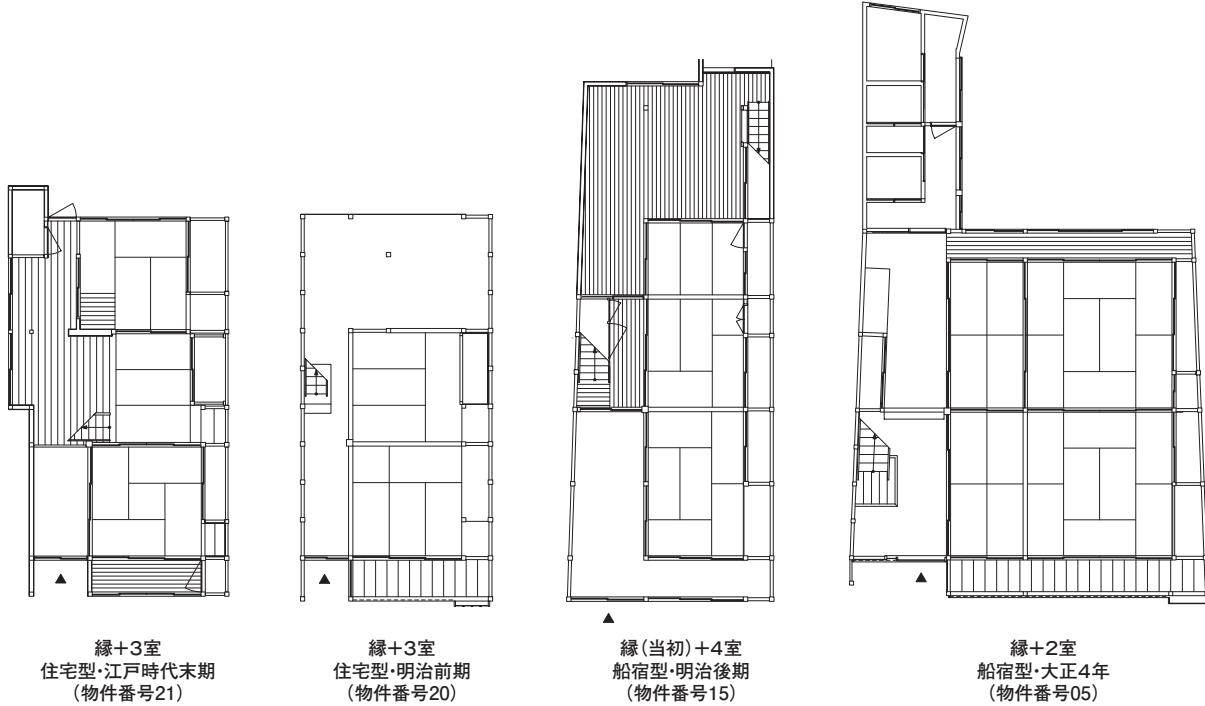


図21 伝統的町家の1階平面構成

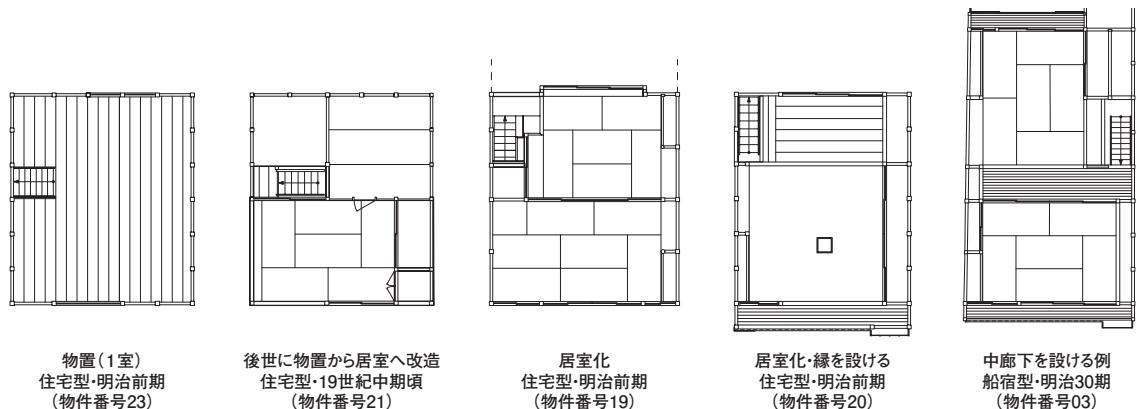


図22 伝統的町家の2階平面構成の変遷

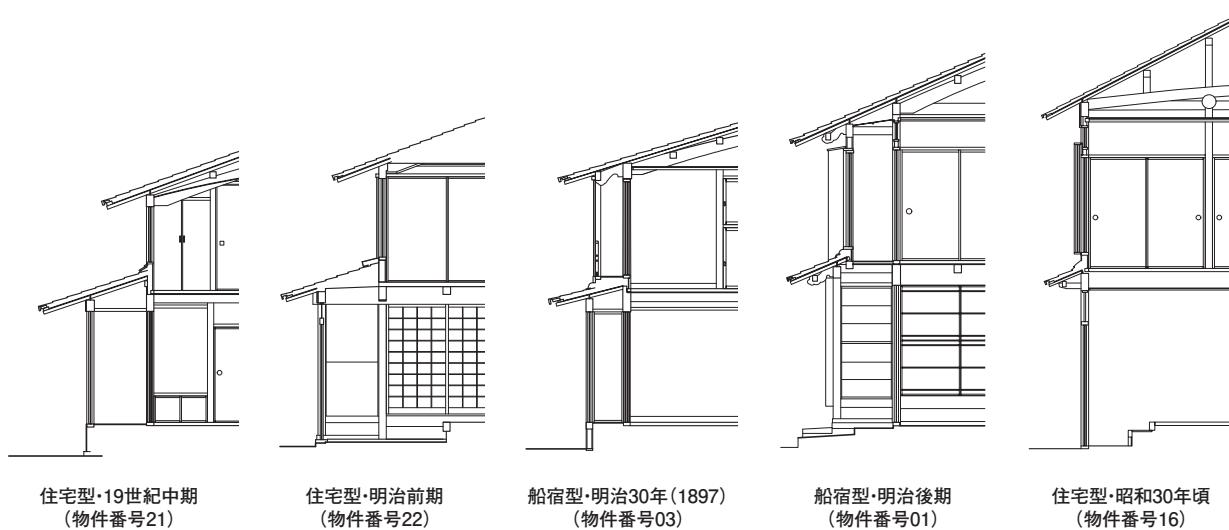


図23 伝統的町家の下屋・2階縁の構造と変遷

く、美保関地区の住民を中心とした氏子で構成される祭祀組織も参加して維持、斎行されている。美保関地区の町家建築には、美保神社への信仰やこの氏子組織の制度（当屋制という）の影響が色濃く反映されている。

町家の内部において、神棚の位置は1階の第1室（オモテノマ）を基本とし、仏壇は第2室よりも背面側に設ける町家が大半である。当屋制の役職のひとつである「當屋」を務める場合、この第1室が神事における儀式の場であり、地域の氏子が参詣する場として使用された。そのため、1階正面の建具は掃き出し戸として開放可能にしている。当地区の町家建築は伝統的な祭礼行事とも非常に深く結びついていることがわかる。

**旅館建築特有の意匠** 美保神社の国幣中社への認定および大正末期から昭和初期にかけての美保神社本殿移転・境内拡張工事によって、近代以降、美保神社への参拝客が増加した。これにより、本通りを中心に大型の旅館建築が多く建設された。昭和後期以降、その一部は



図24 正面下屋上部の土居桁（物件番号15）

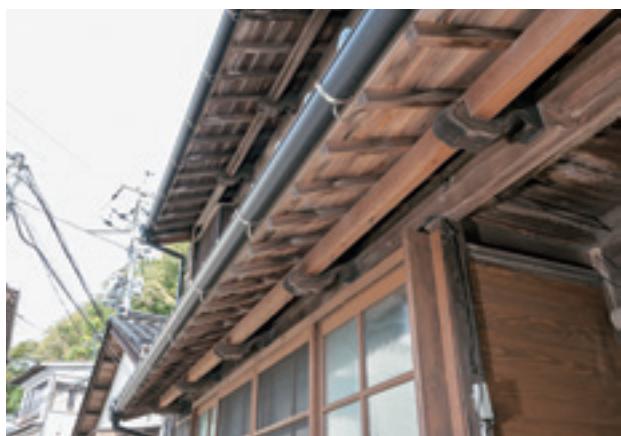


図25 軒下の縁形付きの腕木（物件番号01）

RC造の建築へと建て替えられたものの、現在も当時の様相を伝える建築が残されており、近代の門前町・港町としての繁栄を物語っている。旅館建築である町家では、内装外装とともに接客のための和風意匠が多く採用されている。すべての旅館建築に共通することではないものの、先述の縁形を施した腕木に組物の意匠を採用し、また縁に擬宝珠高欄を用いるなど、寺社建築風の意匠を導入している建物もあり、当地区の町家建築における近代的な意匠のひとつといえる（図26）。

**まとめ** 美保関地区には、近世來の伝統的な間取りや外観意匠をもつ町家が多く残り、住宅型・船宿型・旅館建築といった多様な類型の町家建築が混在する。特に船宿型の町家では、1階下屋上に2階座敷の縁を造る形式が明治時代に発展したとみられ、この形式は近代以降に住宅型の町家にも伝播し、建物の平面形式や構造、表構の特徴としても表出する。これは美保関地区における近代の町家建築の特質といえる。また、現在も美保神社を中心とした信仰や祭礼神事が建物の間取りや建具、使い方などと非常に深く関係し、町並み全体が神事の舞台となっている点も興味深い。

美保関地区の町家建築は伝統的な間取りやその発展過程を色濃く残し、近世末期から昭和前期にかけての門前町・港町としての歴史的発展を現代まで伝えるとともに、我が国における町家建築の近代的変遷過程のひとつとして貴重な事例といえる。

（福嶋啓人）

#### 註

- 1) 奈文研編『美保関 伝統的建造物群保存対策調査報告書』松江市、2024。



図26 寺社建築風の旅館建築の外観意匠（物件番号14）